

釈迦堂の五百羅漢製作期間の考察 HP

釈迦堂建立の決定 1853年釈迦堂建立決定

1853年に中興第十一世照嶽上人が貫主に就任し、半年後釈迦堂建立の許可を得た。

(半年後であるから貫主になったのが1853年1月としても許可は六月以降である)

照嶽上人は貫主となってから退隠までの六年間は、釈迦堂建立の資金集めに奔走した。

照嶽上人は釈迦堂完成(1858年)の翌年(1859年49才)に退隠した。1869年遷化

成田山ゆかりの人物伝(25) 島村俊表より抜粋

嘉永6年(1853)成田山は中興第十一世照嶽(しょうごく)上人(1810~1869)の時代を迎え、先住からの本堂の建立事業が引き継がれた。44歳で住職にのぼった照嶽は、半年後、新本堂(現在の釈迦堂)の建立の許可を得た。折しも天保改革で参詣者も減り、寺内に反対者もいたが、照嶽は江戸から近郷近在を歩き協力を請い、藩主堀田正睦(ほったまさよし)の援助を受け、6年を費やして18万両の寄進を達成、この大工事を完成させたという

狩野一信が松本良山に依頼 1853年狩野一信が良山に依頼

狩野一信は五百羅漢の下絵を一、二カ月で描いたと思われる。狩野38才 良山53才

1853年狩野一信より現釈迦堂堂羽目の五百羅漢(板彫り)制作の依頼を受ける。

釈迦堂前の説明文より

板壁の五百羅漢は、絵師狩野法眼一信の下絵をもとに、仏師松本法橋良山(通称不動金兵衛)が10年の歳月を費やして彫刻したものです。

成田ゆかりの人物伝(11)【松本良山】より抜粋

嘉永6年(一八五三)「このたび、下総の成田山で、御本堂造営が決まり、そのうちの堂羽目に五百羅漢を板彫りにして造ることになった。成田山も急いでいる話なので、ぜひ引き受けてはくれまいか。私も京都にたくさんの五百羅漢を見たが、今度は一生一代の力作を残してみたい」一世一代の仕事が持ち込まれる。五百羅漢の彫刻 旧本堂(現釈迦堂)羽目板8枚の内という一信の言葉に良山は、一度は辞退したものの、またとない仕事と引き受けることとなった。

このとき、狩野一信38歳、松本良山53歳、共に男盛り、熟年の境地である。

同年(1853年)11月、良山は妻そめと弟子3人を同道して、成田山の門をくぐった。

「成田山ゆかりの人」松本良山より

嘉永6年(1853)成田山が本堂(現釈迦堂)を再建するに際し、五百羅漢の下絵を狩野一信に依頼し、その下絵をもとに良山が彫刻するという仕事が持ち込まれた。

良山は大野屋旅館の離れを借り、10年の歳月をかけて8枚の堂羽目(どうはめ)を彫り上げる。

松本良山五百羅漢彫刻をはじめる 1853年11月より彫刻

松本良山は1853年11月に妻、弟子3人と成田参道の大野屋旅館の離れに住み、成田の造り酒屋「鍋だな」の酒蔵の一部を作業場として借り、そこで五百羅漢の制作に没頭した。

五百羅漢の彫刻を1853年11月より開始する。

釈迦堂完成は彫刻を始めてから5年後の1858年である。

松本良山は十年の歳月をかけて完成といわれているが、1853年から十年とすれば、1863年釈迦堂(1858年)完成の五年後である。単純計算すると十年のところ五年であるから八面の内四面しか完成していないことになる。本当なのか？

出山釈迦像の奉納 1860年出山釈迦像奉納（完成を記念して） 還暦の作

松本良山は万延元年(1860)4月に、その完成を記念して「出山釈迦像」を成田山に奉納している。そのとは五百羅漢を指すと思われる。即ち五百羅漢は1860年以前に完成していたことになる。このことから五百羅漢の完成は1857年か？1858年か？1859年か？1860年である。

成田山霊光館ニュース 2009年10月のニュースより

現在展示中の「成田山ゆかりの人々」について紹介します。江戸時代後期の仏師・松本良山(1801-1872)は、旧本堂(現釈迦堂)堂羽目の「五百羅漢」の作者で、万延元年(1860)にその完成を記念して「出山の釈迦像」(写真左)を成田山に奉納しています。この釈迦像は10月末日までの期間限定展示です。お見逃しなく。またその左にある童子像は初公開の良山の作品です。

釈迦堂の落慶 1858本堂（現釈迦堂）を再建

成田山の歴史「成田山の略年表」によると安政5年(1858年)本堂(現釈迦堂)を再建とある。即ち釈迦堂は1858年8月に再建された。

釈迦堂 説明文 重要文化財（釈迦堂前の説明文より）

安政5年(1858)に建立された前本堂であり、大本堂の建立にあたって昭和39年(1964年)現在地に移築されました。

以上が釈迦堂再建までの流れである。

結論(私の推論)

松本良山は1860年4月に、その完成を記念して「出山の釈迦像」を成田山に奉納していることを知り十年の歳月に疑問をいだき、良山の彫刻期間を考察することにした。

私は初め釈迦堂板壁五百羅漢の彫刻は「松本良山が十年の歳月を費やして彫刻」との記述を信じていた。この記述をもとに検証すると(彫刻に費やした年月を平均して単純計算した場合)釈迦堂の落慶時には八面の内の四面しか完成していない、このことは、釈迦堂の側面四面のみで後部四面の五百羅漢の彫刻はなく全て八面の彫刻が完成したのは、釈迦堂落慶から五年後の1863年になると解釈していた。即ち落慶から五年間は後部四面の彫刻はなかったことになる。釈迦堂落慶時に全ての彫刻が完成してないのは、考えられない。

松本良山は1860年に、その完成を記念して「出山の釈迦像」を成田山に奉納している。この記述により1860年以前に五百羅漢の彫刻は完成していた。

それでは五百羅漢の完成は何年か？1857年か？1858年か？1859年か？1860年である。

以上のことから私は五百羅漢の彫刻は釈迦堂落慶時の前年(1857年)に完成したと思われる。即ち五百羅漢の彫刻は1853年から1858年以前の四、五年間で完成したと推測される。

「松本良山が十年の歳月を費やして彫刻」ではなく「松本良山が約四年の歳月を費やして彫刻」が正しいのではないか？実際には四年から四年数カ月であろう。

しかし釈迦堂前の説明文には「松本良山が十年の歳月を費やして彫刻」とあるが、これは松本良山が苦勞して完成させた素晴らしい彫刻であることを、後世の人々に知って欲しい為に誇張して表現したものと思われるので、とくに訂正する必要もない。

釈迦堂の彫工は四人いるが、嶋村俊表、藤原政義、後藤縫之助は共に釈迦堂再建の前年安政四年(1857)に彫刻は完成している。製作依頼された彫刻であるから再建に間に合うように製作するのは当然である。即ち他の彫工同様1857年に完成したと思われる。

内陣欄間 彫工 長谷川権頭藤原政義・「石原流」 安政四年(1857)

欄間 [松に孔雀] [桐に鳳凰] [松に孔雀]

軒下羽目板 彫工 後藤縫之助 安政四年(1857)32才

成田ゆかりの人物伝 (11) 【松本良山】より

嘉永6年(一八五三)ペリー率いる黒船が来航、江戸は大騒動となった。

この年、良山には生涯忘れられないことが起こった。江戸の有名な絵師、狩野一信が、新勝寺の本堂を造るに際し、五百羅漢の下絵を一信が書き良山が彫刻するという一世一代の仕事を持ち込んだのである。そのころ、狩野一信は芝に住み、将軍家の御絵師として、狩野派の一家を成していた。「このたび、下絵の成田山で、御本堂造営が決まり、そのうちの堂羽目に五百羅漢を板彫りにして造ることになった。成田山も急いでいる話なので、ぜひ引き受けてはくれまいか。

私も京都にたくさんの五百羅漢を見たが、今度は一生一代の力作を残してみたい」一世一代の仕事が持ち込まれる。五百羅漢の彫刻 旧本堂(現釈迦堂)羽目板8枚の内という一信の言葉に良山は、一度は辞退したものの、またとない仕事と引き受けることとなった。

このとき、狩野一信38歳、松本良山53歳、共に男盛り、熟年の境地である。

同年(1853年)11月、良山は妻そめと弟子3人を同道して、成田山の門をくぐった。

この日から十年、良山は自分のすべてを五百羅漢に注いだ。

一方、妻のそめは夫の作業の完成を祈って、その日から一日もかかさず水行を始めた。

良山は門前の大野屋旅館の離れを借りて、仕事場には鍋店酒造の酒蔵の一隅が使われたという。しかし長期にわたり根気と才能が必要とされる作業、ときに一信と良山の間にも衝突が起こった。良山は、一信の下絵(成田山保存)には厚みがなく、羅漢の表情がわからないと言い、良山が下絵にはない部分を勝手に作ったと一信は怒った。

また、良山も仕事に行き詰まり、江戸へ帰ろうとしたこともあった。

しかしその途中、夕立にあって辻堂で休んでいると、目の前に蜘蛛が巣を張っていた。

蜘蛛が風で破れた巣を懸命につくろっていると、また風に破られる。この繰り返しをしながら、やがて蜘蛛は巣を元通りに完成した。

良山は「大野屋旅館に泊り彫刻に没頭の仕事も蜘蛛の仕事も同じことではないか、苦難の中の繰り返しである」ということを蜘蛛に教えられたのである。

(石橋徳也覚書「成田史談31号」)

釈迦堂前の説明文全文

釈迦堂 重要文化財

安政5年(1858)に建立された前本堂であり、大本堂の建立にあたって昭和39年現在地に移築されました。ご本尊には仏教を開かれた釈迦如来が安置されています。

周囲の板壁には修行僧として最高位に到達し、功德をそなえた五百羅漢像を見事な浮彫彫刻で8面、また扉には、中国の代表的な孝子物語である二十四孝12面を付けるなど堂内の華麗な欄間彫刻とともに、時代の特徴をよくあらわしています。板壁の五百羅漢は、絵師狩野法眼一信の下絵をもとに、仏師松本法橋良山(通称不動金兵衛)が10年の歳月を費やして彫刻したものです。また扉の二十四孝は、無関堂島村俊表の作です。

建物は5間堂で、中央の柱間が広くとられています。屋根は入母屋造の瓦棒銅板葺で、正面には千鳥破風と軒唐破風付の向拝を設け、荘重さを加えています。組物には、三手先を詰組とし、軒は二軒の繁垂木で総檜木を用いています。

注 色々な資料、文献を参考にして、考察したものです。

緑色は、参考資料、文献、説明文等の記述である。

釈迦堂再建の時系列的考察

釈迦堂の落慶時には五百羅漢の彫刻が全て完成していない事は常識的に考えあり得ないだろう。

また落慶時に五百羅漢の彫刻が全て完成していなかったとの記述は見当たらない。

以上のことをふまえて釈迦堂建立の過程を時系列的に考察する。

下記記述から嶽上人が貫主に就任したのは、一月か二月である。二月と仮定して考査する。

(1853年に中興第十一世照嶽上人が貫主に就任し、半年後釈迦堂建立の許可を得た。)

釈迦堂再建の流れ (推測)

1. 1853年8月釈迦堂再建の許可を得て成田山は狩野一信に五百羅漢の下絵を依頼。
2. 1853年9月、10月の二カ月で狩野一信が五百羅漢の下絵を描く。
3. 1853年11月初旬狩野一信が松本良山に彫刻を依頼した。一度は辞退するも引き受ける。
4. 1853年11月中旬に成田大野屋の離れに引っ越し下旬から彫刻を始める。
5. 1857年の暮れに五百羅漢の彫刻完成か? 遅くとも完成は1858年前半であろう。
6. 1858年8月11日釈迦堂落慶

以上のことから五百羅漢の彫刻期間は、四年か四年数カ月であろう。四年とすれば五百羅漢の彫刻は、単純計算すると一面半年、八面で四年となる。

参 考 資 料



【出山釈迦像】 (しゅっせんしゃかぞう)

江戸時代後期の仏師・松本良山(1801-1872)は、旧本堂(現釈迦堂)堂羽目の「五百羅漢」の作者で、万延元年(1860)にその完成を記念して「出山の釈迦像」(写真左)を成田山に奉納しています 台座付き 高さ 1,2M

【出山釈迦像】 (しゅっせんしゃかぞう)

29歳のとき出家して求道の旅にでます。あらゆる苦行を、山の中に入って修行します。それは想像を絶する激しいものでした。こうして六年の苦行が続き、髪や髭は伸び、体は骨と皮の状態になりました。身を苦しめることの無意味さを知った釈迦は、ついに山を下ります。このときの釈迦の姿をあらわしたのが「出山の釈迦像」です。
天保十二年(1841)照阿上人代に発願され、

十二年後の嘉永六年(1853)九月六日、照嶽上人代に手斧始めの式を行った。

安政四年(1857)九月六日上棟、翌(1858年)五年八月六日から七日間上棟規式を修行、同月十一日入仏式を行い、翌日盛大な練供養を行った。

私の考察推理にご意見等御座いましたら是非お伺いしたいものです。